『クレーヴの奥方』考

QUELQUES RÉFLEXIONS SUR 《LA PRINCESSE DE CLÈVES》

博士後期課程　仏文学専攻53入学
滝　川　広　子
HIROKO TAKIGAWA

マリー＝マドレーヌ・ピオッシュ・ド・ラヴェルニュ、のちのラファイエット伯爵夫人は、1634年、小貴族の娘として、パリで生まれ、1655年、名門貴族ラファイエット伯爵と結婚する。結婚後、夫の領地、オーヴェルニュ地方へ行くが、その後、パリに定住し、定期的にラファイエット伯爵がパリを訪れるという、変則的な結婚生活を送った。彼女は社交界において、その理性と才智で評判を取り、アンヌ・ドートリッシュ、アンリエット・ダングルテール、サヴォワ公妃等に仕え、ルイ14世の信頼も厚く、宮廷で確固たる位置を占めると同時に、ラファイエット家の領地争い等の数々の訴訟にも、男性顔負けの活躍を示したという。このように、ラファイエット夫人は、活動的で、実際的な女性として、有能ぶりを発揮したが、また、一方では、生来病弱で、家にこもり、≪怠惰に浴みする≫ことを好む面もあった。彼女は、＜真実夫人＞、＜霧夫人＞と呼ばれたと伝えられている。

ラファイエット夫人は、文学にも大きな関心を寄せ、ヴォージラール街の彼女の屋敷には、メナージュ、スグレ、ユエ、セヴイニェ夫人、そして、ラ・ロシュフーコーといった文人達が集まり、一種の文学サロンを形作っていた。その中から、3つの小説が生まれる。『モンパンシエ公爵夫人』(1662)、『ザイード』(1669～71)、『クレーヴの奥方』(1678) である。最初の2作はスグレの名で、『クレーヴの奥方』は匿名で出版された。ラファイエット夫人は、生涯、作者の名乗りはあげなかったが、現在、これらの小説の作者がラファイエット夫人であることは、皆の認めるところである。しかし、上記の文人達の役割については、意見が分かれている。また、彼女の死後出版された『タンド伯爵夫人』(1724) についても、これをラファイエット夫人の作品と認める点では、大方、一致しているが、創作年代をめぐっては、批評家達の意見が対立している。

『クレーヴの奥方』は、世に出て以来、3世紀にわたって、古典主義小説の典型、心理小説の傑作として、フランス文学において、揺ぎなき地位を保って来た。その間、たくさんの人々が、この作品について語っている。クレーヴ夫人の心理をめぐって、様々な解釈が飛び交い、そのモラルや小説技法に関しては、デカルト、パスカル、ラシーヌ、コルネイユ等の同時代人達からプルーストに到るまでの数多の作家の名が挙げられ、関連づけられている。『クレーヴの奥方』については、全て、言い尽くされた観がある。しかし、全てが言われたということは、全てが明白になったということではない。余りに多くが語られると、かえって、輪郭がぼやけてしまうことが往々にしてある。『クレーヴ

の奥方』も、作者、ラファイエット夫人同様、霧に包まれたような、判然としないものがあるように思われる。≪もはや何の秘密もない≫というジイドの言葉[1]には承服できないのである。

この論文においては、『クレーヴの奥方』のみを取り上げた。最後の隠遁に到るまでのクレーヴ夫人の心の葛藤を中心に、この作品について考えてみたいと思う。その前に、まず、この小説を5つの章にわけて、ざっと、筋を述べることにする[2]。

第一章：舞台となるアンリ2世在位の晩年の宮廷描写に続いて、古今東西、恋愛小説の最もオーソドックスな図式である、<三角関係>のドラマが始まる。

宝石商の店でシャルトル嬢を見初めたクレーヴ公は、激しく彼女に恋するようになり、父親の反対にも挫けず、父の死後、シャルトル嬢と結婚する。この間、シャルトル嬢には、クレーヴ公を含めて3つの縁談があったが、相手方の家族や、国王の反対で、全て壊れてしまう。これは、シャルトル嬢自身の落ち度ではなく、野心や嫉妬の絡まった、周りの人間関係の結果である。この時代、結婚とは、愛し合う二人の結びつきではなく、両親の打算や感情によって決められる、一種の取り引きであった。

全ての縁談が、娘にとって不面目な結果に終わってしまい、シャルトル夫人の自尊心は深く傷つく。この時以来、彼女の心は、何とか娘に立派な結婚をさせたいという一事で占められる。そこで、彼女は、娘がクレーヴ公に愛情を感じていないことは知っていたが、クレーヴ公の申し出を承諾する。恋に夢中になっているとはいえ、クレーヴ公は、許婚者の気持ちが、自分の望んでいるようなものではないことに気づく。毎日のように、その不満を訴えるクレーヴ公の姿を描きながら、ルーヴル宮での華々しい結婚式で、第一章は幕を閉じる。

第二章：クレーヴ公との結婚後から母親の死までの、この章の中では、舞踏会で出会った、クレーヴ夫人とヌムール公との間に芽生えた恋が進展していく様が描かれている。

夫に特別な愛情は持っていないが、貞淑な妻との評判を得るに到ったクレーヴ夫人は、ヌムール公と会って、それまで知らなかった感情を抱く。自分の気持ちに気づかないまま、彼女は、微妙な変化を見せる。王の愛人で、権力を握っている、ヴァランチノワ夫人に急に関心を持ったり、母親にヌムール公の話はしなかったりという態度がそれである。シャルトル夫人は、そんな娘の気持ちを見抜き、まず、ヴァランチノワ夫人の話でそれとなく、次いで、ヌムール公の移り気な性格と、王太子妃との噂をほのめかすことによって、より明白に、娘に警告を与えるが、空しい。ヌムール公と王太子妃との噂は、クレーヴ夫人に嫉妬の念を起こさせ、それによって彼女は、自分の気持ちに気づくのである。

ほどなく、シャルトル夫人は重い病の床につく。死を控えてシャルトル夫人は、初めて、ヌムール公に対する娘の気持ちにはっきり触れて、娘の取るべき道について説くのである。

≪クレーヴ殿に対する義務のことをお考えなさい。自分自身に対する義務を考えなさい。〔…〕宮廷から身をひくのです。クレーヴ殿に頼んで、遠くへ連れていってもらいなさい。初めはどんなに嫌に思えても、恋愛から生じる不幸と比べたら、はるかにましだということがわかるでしょう。≫(278頁)

こうして、クレーヴ夫人は、唯一の頼みである、母親を失うのである。

第三章：ここでは、クレーヴ夫人が母親の死後、自分の愛情と闘う姿が描かれている。この間、様々な事件が起こって、彼女を<告白>へと追いつめていくのである。

最初の「トゥールノン夫人の話」の中での、≪私は、誠実さというものにとても心を動かされるので、もし私の恋人が、いや、妻でさえも、他の男が好きになったと告白したら、私はきっと、悲しむだろうけれども、怒りはしないと思う。恋人や夫の立場を離れて、助言を与え、同情してやるつもりだ。≫(284頁）という夫の言葉は、クレーヴ夫人の心の中に、<告白>の種を播くことになる。一方、イギリス王冠の野心も捨てたヌムール公は、遠回しではあるが、かなり大胆で巧妙なやり方で、自分の恋を打ち明ける機会を、終始窺い、クレーヴ夫人の肖像画を盗むことさえする。その現場を見ながら黙っていたクレーヴ夫人は、自責の念に捉われ、自分の気持ちだけでなく、声や顔色も制御できなくなっている自分の状態を考えて、追い詰められた気持ちになる。

その後、ヌムール公の落馬という事件が起こり、その際、夫人は、自分の心の動揺と不安を顔にだしてしまう。ヌムール公はそれに気づき、そして、気がついたことを彼女に知らせる。クレーヴ夫人は、自分の感情を表に現わしてしまったことを悲しみ、相手に知られてしまったことで、心は乱れる。それから、「シャルトル侯の話」を含む、手紙事件が持ち上がる。クレーヴ夫人は、激しい嫉妬に苦しむが、ヌムール公の潔白がわかった翌日には、夫の同席のもとではあるが、ヌムール公と差し向いで過ごす喜びに身を委ねてしまう。その後で、自分の心の弱さに絶望するのである。ヌムール公から逃げる為に、彼女は、田舎へ行くこと、そして、もしクレーヴ公が執拗に反対したら、彼に全て打ち明けようと決心する。こうして、<告白>は、クレーヴ夫人の心の中で、はっきりとした形をとるのである。

クーロミエで、パリへ戻りたがらない理由を、夫に問い質された夫人は、ヌムール公が物陰で聞いているとも知らず、彼の名を伏せたまま、自分の気持ちを夫に打ち明ける。こうして為された<告白>は、まず、≪クレーヴ殿に頼りなさい≫という母の言葉で温床が作られ、誠実さについての夫の言葉で種を播かれ、初めは気違い沙汰とみなされながらも、夫人の心の中でずっと育ってきたものであり、この小説の核をなし、作者によって、入念に準備されてきたものでもある。とはいえ、この場面では、計画的行為というよりも、多分に、状況的な未完の行為といった印象が強いように思われる。やがてクレーヴ公の死へと発展していくこの<告白>をもって、第三章は終わりを告げる。

第四章：妻の気持ちを知って、嫉妬のとりことなったクレーヴ公は、どうしても相手の男の名が知りたくて、夫人に罠をかけてまで、ヌムール公の名をつきとめるが、結果は、苦悩が増すだけであった。ヌムール公がシャルトル侯に口をすべらした為、<告白>の話が人の知るところとなり、クレーヴ夫妻は、互いに疑心暗鬼となり、苦しむ。一方、ヌムール公も、うっかり喋ってしまったことを深く悔い、控え目で悲し気な態度を保ったので、彼の軽はずみに怒りを感じていたクレーヴ夫人の心も、知らず知らず和いでいくのであった。王女達の婚礼や、アンリ2世の事故と死という宮廷の取り込みに紛れて、彼らは、自分達の感情を、世間の目に露わにせずにすんでいる。

新王のランスでの戴冠式と、それに続く旅には同行せず、クレーヴ夫人は、一人で、クーロミエへ行く。ヌムール公は、夫人に会いたい気持ちが募り、こっそりとクーロミエへ忍んでくる。彼は、窓ごしに、クレーヴ夫人の姿を見ることができたが、夫人が気がついて隠れてしまった為、それ以上は望めず、空しく帰る。しかし、従者にヌムール公の尾行を命じたクレーヴ公は、報告を聞いて妻の裏切りを信じ込み、この打撃に耐えきれず、重い病気となる。そして、彼は、妻の不実を責めながら、しかし、最後まで彼女の愛を求めながら、息をひきとり、第四章は終わる。

第五章：夫の死から何か月かが過ぎ、落ち着きを取り戻したクレーヴ夫人だが、ヌムール公の姿を見かけて、再び、心が騒ぐ。自分は今や自由であり、ヌムール公との間には、もう、何の障害もないのだという考えが、初めて、彼女の心に浮かぶが、それはすぐ打ち消される。理性と徳から生まれた信念と、激しい愛情の板ばさみに悩みながら、とにかくヌムール公と会わないようにしようと決めるが、ヌムール公は、シャルトル侯に頼んで、夫人と二人きりで会う機会を設ける。

この会見において、クレーヴ夫人は、初めて自発的に、自分の言葉で、自分の気持ちを語る。ヌムール公に対する愛情を打ち明けた後で、＜義務＞と＜心の平安＞という二つの理由を挙げながら、彼女は、ヌムール公との結婚を拒むのである。しかし、どんなに理路整然と自分の決心を述べても、彼女の気持ちはまだ揺れている。ヌムール公の訴えに心を動かされ、≪もう少し時の経つのを待って下さいませ。≫(389頁) との言葉を残して立ち去るのである。この場における拒絶は、決して最終的なものではない。それが決定的なものとなるのは、クレーヴ夫人が生死の境をさまよう長い病気によって、死の必然性を悟った時である。この外からの助けによって、彼女は自分の情念を克服し、宮廷から身をひいた生活を送るようになるのである。

≪かなり短いものではあったが、彼女の一生は比類なき徳の模範を残したのである。≫(394頁) という一文で、この物語は終わりを告げる。

以上がこの小説の粗筋である。クレーヴ夫人を中心とした三人の主役達についての考察に移る前に、この小説の中での、＜歴史＞と四つの＜エピソード＞の役割に、少し触れてみたい。

I　歴史・エピソード

≪とりわけ、私が感じることは、この本は、宮廷の世界と、そこでの人々の生きる様を正確に模写しているということです。〔…〕これは、小説ではなく、正しく、記録なのです。≫

『クレーヴの奥方』についての、ラファイエット夫人の言葉である[3]。彼女が、この作品を書くにあたって、豊富な歴史的資料を綿密に調べたことは、よく知られている。しかし、『クレーヴの奥方』を読む時、＜記録＞という印象は薄く、＜歴史＞は、第二義的に取り扱われているように思われる。それは、物語の進行とともに、歴史的事項の数とその重要性が減少していくことからも、幾つかの巧妙な歴史の改竄が行われていることからも、そして、何よりも、この小説の主題が、架空のクレーヴ夫人の、架空の恋物語であることから、うかがわれる。この作品において、＜歴史＞は、まず、小説

の枠組に使われているように思われる。

最初に、アンリ２世在位の晩年という時代が設置され、そこに集まる人々が紹介される。宮廷人達の肖像(ポルトレ)は、語り手によって外側から描かれ、一種の様式化、理想化が行われている。ここで強調される＜豪奢＞は、登場人物達を美化すると同時に、次の、宮廷の内幕描写と対照をなし、華やかな宮廷の虚構性を浮き彫りにする。≪乱脈にはならない動揺≫が常にある、この宮廷の描写は、続く物語の中でも、時には語り手の、時には作中人物の口を借りて、続けられている。それは、魅力的な＜気晴らし＞の場であり、虚偽と打算に満ちた世界である。

ここに描かれている宮廷が、アンリ２世の時代よりも、むしろ、ルイ14世の時代を思わせるものであるということは、衆目の一致するところである。この時代、当時の風俗を描くのは専ら喜劇で、感動や重厚味を狙う話は過去の時代に舞台を置くのが普通であった。このことと、歴史に対する自分の嗜好も手伝って、ラファイエット夫人は＜歴史＞をこの小説に持ち込んだのであろう。しかし、彼女が描きたかったものは、単なる過去の事実としての＜歴史＞ではなく、その中にうごめく人間の姿であるように思われる。そして、その舞台として、自分の熟知しているルイ14世の宮廷の雰囲気を再現させたかったのではないだろうか。より洗練された、絢爛たる文化の花開いた、ヴェルサイユの宮廷の雰囲気を反映させる為には、同じように華やかな宮廷文化の栄えた時代を選ばなければならない。そこで、彼女は、以前から興味を持っていたアンリ２世の時代、フランソワ１世によってもたらされたルネサンスの息吹が見事に開花したこの時代に、小説の舞台を求めたものと思われる。そして、ラファイエット夫人の心の中には、時代の違いはあっても、そこに生きる人間の姿は、さほど変わりはないという思いがあったことであろう。この意味で、冒頭の、≪正確な模写≫という言葉は興味深い。

こうして、＜歴史＞はまず、小説の場所と時代を設置し、豊富な資料に裏付けられた正確さが、話に＜真実味＞を与える。そして、ラファイエット夫人は、ヴァロワ王朝の宮廷に、絢爛たるヴェルサイユの姿を反映させることによって、＜歴史＞と＜現実＞を巧みに融合させたといえる。

次に、四つの＜エピソード＞であるが、まず第一の「ヴァランチノワ夫人の話」は、舞踏会での出会いの直後、二番目の「トゥールノン夫人の話」は、シャルトル夫人の死とクレーヴ夫人帰京の間、第三の「アン・ブーリンの話」は、クレーヴ夫人が社交界にまた顔をだし始めた頃で、ヌムール公が肖像画を盗む直前、そして、四番目の「シャルトル侯の話」は、クレーヴ夫人が嫉妬に苦しむ恐しい夜と、ヌムール公と手紙を書きながら喜びに浸った午後の間で、それぞれ、語られている。四つの＜エピソード＞は新しい状況が生まれて、その結果なり、それに対する反応なりが期待される時に、読者の興味にブレーキをかけるような形で挿入され、物語の＜時間＞に、存在感と現実感を与えているといえる。クレーヴ夫人の恋物語を縦糸とするならば、これらの話は、いわば、横糸として織り込まれ、他の人生を垣間見させてくれるのである。

同時にまた、全て愛について語られた、独立完結した観のある、これら四つの＜エピソード＞は、クレーヴ夫人の心理に微妙な影を投じ、小説の主題と密接な関わりを持ってくる。「ヴァランチノワ

夫人の話」は、儀礼的な仮面の下に隠された宮廷の虚偽や駆け引き、愛情故に、彼女に隷属しているアンリ２世の姿を示している。「トゥールノン夫人の話」は、愛する人々のもたらす恐しい苦悩を、「アン・ブーリンの話」は、男性の移り気な性質と、嫉妬の引き起こす、残酷で悲劇的な行為を語り、最後に、自分の叔父でもあり、ヌムール公の親友でもあるシャルトル侯の、トゥールノン夫人に劣らず狡猾で、ヘンリー８世と同じように移り気な姿が描かれる。クレーヴ夫人は、宮廷は見かけどおりではないことに気づき、この世界では、誰も信頼に価しないことを悟る。そして、愛情は、私達をその奴隷とし、苦悩を与え、時には命を奪うことさえあるということを知る。

こうして、クレーヴ夫人が＜エピソード＞から学び取ったものは、彼女自身の経験と結びついて、彼女の思考や行動に大きな影響を与えていく。このように、一見、無駄な余談のように思われる四つの＜エピソード＞は、小説技法の上でも、物語の面でも、重要な役割を担っているといえる。

Ⅱ　クレーヴ公

まず彼は、＜思慮分別に富んだ男＞として紹介される。しかし、シャルトル嬢との出会いに始まるこのドラマでは、彼は、終始、＜理性的＞というよりも＜情熱的＞な姿を見せ続ける。慎重で、柔順な息子であった男が、恋をすると、父親に逆らうことも辞さず、友情も顧みず、一途に、愛する女性と結婚することだけを思いつめるようになる。最初に与えられたイメージは壊されていくのである。また、一方で彼は、他人の心の分析に長けた面も見せる。彼には、シャルトル嬢が自分に対して特別な愛情は持っていないことが、はっきりわかっているのである。毎日のように彼は、シャルトル嬢に不満を訴え、その度に彼女の返答に失望する。しかし、だからといって彼は、結婚を取り止めようとはしなかった。彼は、結婚後に、愛情が生まれることを期待したのであろうか？　敬意と感謝とが、愛とは何かということも知らないシャルトル嬢から得られる最上のものだと思ったのであろうか？　激しい思いを寄せている女性をまず、自分の妻とすることが第一であったのであろうか？　おそらく、全てであろう。

クレーヴ公は、第二章には、殆ど姿を現わさない。シャルトル夫人の死から＜告白＞に到る第三章では、妻を熱愛し、妻を信じる＜夫＞、彼女の愛を求め続ける＜恋人＞という、前章と変わらない姿を見せ続け、クレーヴ公は、専ら外側から描かれ、彼の深い心理は述べられていない。妻の思いがけない＜告白＞によって目を開かれるまでのクレーヴ公には、素晴らしい洞察力と、恐るべき盲目とが同居しているように思われる。妻の自分に対する気持ちを見抜く時や、サンセールの恋を見破った時のように、他人の心理に非常に敏感な面を見せる一方で、彼は、自分の妻は他の女性とは違って、他の男に愛情を抱くことはないと無邪気に信じこみ、自分は妻の打ちあけ相手になれると信じているのである。

クレーヴ公が、真の主役として前面に出てくるのは、＜告白＞以降である。真実を知らされた彼は、妻に対する愛情と尊敬を保ちながらも、嫉妬に苦しみ、社交人としては、妻を宮廷に伺候させなければならないと思い、個人としては、妻を自分一人のものにしておきたいと願い、＜高潔な紳士（オネットーム）＞

と同時に<嫉妬深い夫>という矛盾した行動を取る。第四章のクレーヴ夫妻の会話の中での彼の言葉は、段々と感情的なものとなっていき、彼が真実に耐えきれず、正気を失っていく様がうかがわれる。

≪私は、自分ではどうすることもできない、激しく、不安定な気持ちで一杯です。もう、自分があなたにふさわしくない男に思われるし、また、あなたが私にふさわしくないような気もする。私はあなたを熱愛し、あなたを憎む。あなたを怒らせ、そして、許しを乞う。あなたを讃美すると同時に、そんな自分を恥ずかしく思う。もう私には、平静な心も、理性もないのです。≫(362～363頁)

この、殆ど狂気ともいえる状態から彼を救うものは、もはや、死だけであろう。従者にヌムール公を尾行させるという、<高潔な紳士(オネットーム)>にはふさわしくない行為の報酬として、彼は、自分の死を得る。そして、その死の床においても、まだ彼は、妻の愛を求め続けるのである。

≪どうか、せめて私に、あなたが私の思い出を大切にして下さるだろうと信じさせて下さい。そして、もしあなたの思いどおりになるものであったならば、あなたが、今、別のひとに抱いている感情を、きっと私に抱いて下さったであろうと思わせておいて下さい。≫(376頁)

この言葉を残して、クレーヴ公は、立派な態度で息をひきとる。

ラファイエット夫人までは、文学において、<裏切られた夫>、<愛されない夫>は、むしろ、喜劇の範疇に属していた。ラファイエット夫人は、ここで、滑稽でも愚かでもなく、悪人でもない、<妻を熱愛しているが報われない夫>を創りだしたのである。クレーヴ公は、フランス文学における、最初の、読者の共感を呼ぶ、<立派な夫>像であると言われている。確かに彼は、自分の情念を克服できず、また、妻の期待にも応えられなかったという弱さを持っている。しかし、情熱にひきづられ、嫉妬のとりことなりながらも、<高潔な紳士(オネットーム)>としての努力を続け、最後まで妻の愛を求め続けたクレーヴ公の姿は、その弱さにも拘らず、いや、その弱さ故に、この上もなく感動的である。

Ⅲ スムール公

ジャック・ド・サヴォワ、ヌムール公爵は実在の人物であり、短命で殆ど歴史に跡を残さなかったクレーヴ公とは違って、輝かしい名声に包まれた人である。<宮廷の花形>で、また、派出な艶聞を振り撒いたといわれる。ラファイエット夫人の描いた肖像(ポルトレ)は、ブラントームの『名将伝』[4]が伝えるヌムール公と、さほどかけ離れてはいない。彼女は、歴史の描くヌムール公を、自分の小説のプロットの中に、巧みに誘い込んだのである。

≪自然の傑作≫の肩書きと共に登場したヌムール公は、舞踏会での出会いから、肖像(ポルトレ)とは違った姿、真の愛情に動かされる男の姿を見せる。<浮気な社交人>が、控え目で、憶病でさえある、<恋する男>に変貌するのである。確かに、彼は、愛情故に別人になった観がある。他の女性達を顧みなくなり、イギリス王冠という野心も捨て、社交界を避けて孤独を好むようになる。以前のように、相手に大胆に近づいていくかわりに、柳の下で涙を流し、絹細工職人の家の窓から、愛する女性をそっと見つめるのである。情熱のとりことなったクレーヴ公が、ラシーヌの作中人物を思わせるのに対し

て、ヌムール公は、抒情豊かで魅力的な、伝統的長編小説の主人公の姿を見せている。しかし、私達は何か不安を覚える。果たして、本当に彼は、真の愛情によって人変わりしたのであろうか？　時々、以前のヌムール公が現われ、危険信号を送ってくる。ヌムール公の行動の中には、恋の駆け引きに長けた男の巧妙さ、大胆さが認められる。そして、柳の木の人で、彼は、クレーヴ夫人に呼びかける。

≪あなたは私を愛している。隠そうとなさっても無駄です。知らず知らず、御自分で、その印を見せて下さったのですから。私は自分の幸福を知っている。その幸福を味わわせて下さい。もう、私を不幸にするのはやめて下さい。≫(369頁)

また、最後の会見では、彼はこう叫ぶ。

≪ああ！　あなたは何という幻のような義務で、私の幸福に反対なさるのです？≫(385頁)

≪私の幸福≫と彼は繰り返す。彼の恋愛に対する考えは変わっていないようである。ヌムール公にとっては、彼を愛する女性は皆、たとえどんな状況にいようとも、彼の愛情と自尊心を満足させる為に、彼に身をまかせるべきなのである。彼の変貌は、性格が変わった為ではなく、戦術が変わっただけのように思われる。その点、クレーヴ夫人は欺されてはいない。

≪どうみてもあなたは、生まれつき恋愛に向いていらっしゃるし、そして、首尾よく思いをお遂げになる力を持っていらっしゃいます。あなたは、今までに何度か恋をなさいました。これからもなさるでしょう。わたくしではもう、あなたを幸福にしてあげられなくなるでしょう。≫(387頁≫

そして、この本の最後は素っ気なく記す。

≪何年かが過ぎ、時と不在とが、彼の苦悩を和らげ、その情熱をも消し去ったのである。≫(394頁)

こうして、ヌムール公は、歴史の語る＜典型的な社交人＞からロマネスクな主人公へと変貌した姿で私達の前に現われ、最後に、再び歴史の中へと戻っていく。この小説におけるヌムール公は＜恋するドン・ジュアン＞と言える。熱情を抱き、夢想に浸り、涙を流すその姿が、どんなに抒情的で、感動的であっても、ドン・ジュアンは、やはり、ドン・ジュアンなのである。

Ⅳ　クレーヴ夫人

クレーヴ公との結婚から、ヌムール公と出会うまでのクレーヴ夫人は、母親に従順で、愛とは何かということも知らぬ、美しい人形のような印象を与える。彼女自身の人格といったものは、まだ、うかがえない。ヌムール公と出会って愛を知った彼女は、自分でも気づかないまま、母に隠し立てをするなどといった変化を見せるが、まだ、母親に頼りきっている状態は変わらない。彼女が一人立ちし、自分の心を正面から見て、自分と闘い始めるのは母親の死後である。

闘いは、まず、愛情を消すことから始まり、次いで、その印を見せまいという気持ちになり、ついには逃げるより仕方なくなる。愛情に流されてしまった一瞬の後で、自分を取り戻し、新たなる決意を固めるが、また流されていく。この間の彼女は、いつも後手、後手にまわり、敗北の連続である。最後に彼女は、半ば状況的に夫に告白し、夫にすがることによって、窮地から脱しようとする。これ

は、自分一人では闘いきれなくなった彼女の弱さを物語るものである。自分の心の葛藤にばかり目を向けていた為、夫の性格を見誤ったともいえる。彼女は夫に、彼の力以上のものを求めたのである。肖像(ポルトレ)に描かれた<慎重さ>の下に、情熱的な性格を秘めている夫は、社会の表裏を知りつくし、透徹した目と理性の勝った性格で、感情に押し流されることのないシャルトル夫人の代わりを務める力を持ってはいなかったのである。しかし、夫に力以上のものを求めたからといって、クレーヴ夫人を責めるのも、妻の期待に応えられなかったクレーヴ公を、弱い人間だと決めつけるのも酷であろう。彼らが弱いのではなく、情熱が人間の力を超えているのであり、人間とは、自分の理性だけではどうにも律しきれない感情を持った、弱い存在なのである。

クレーヴ夫人は、<告白>の結果として、夫の死を迎えることになる。彼女は、深い悲嘆にくれるが、彼女の闘いはまだ続く。苦悩と迷いの日々を送る彼女は、ヌムール公と二人きりで、ゆっくり話し合える機会を持つ。ここで初めて、彼女は、自分の気持ちを明らかにし、前述のように、<義務>と<心の平安>という二つの理由で、ヌムール公との結婚を拒むのである。

この会見に到るまでの、彼女の心の葛藤の中で、まず、否定されるものは<愛一情熱>である。愛は、その初めは、魔法のような魅力をもって、私達の心に喜びや陶酔感を吹き込むが、その裏側には、人間の理性を狂わせ、私達を、屈辱的な、あるいは残酷な行為へと向かわせる恐しい力を秘めている。クレーヴ夫人は、情熱に流されて我を忘れることを堕落とみなし、愛につきものの嫉妬を≪あらゆる苦痛のうちで最悪のもの≫と考える。愛の始まりの胸のときめきは、未来の幸福を約束しているかのようである。ラファイエット夫人は、抒情的な筆致で、愛の魅惑的な力を描きだす。舞踏会での出会い、手紙書きの午後、クーロミエの夕べ……。しかし、この喜びが大きければ大きいほど、後にくる幻滅の悲哀も激しい。愛は、しばしば自尊心や利害と結びつき、独占欲の強い、利己的な性格を露わにしながら、その力に屈した者に、耐え難い苦悩を与える。一方で、また、愛は、しばしば実にあっけなく消えてしまうものである。クレーヴ夫人は、男性の中に、移り気で征服者的性質を認める。障害こそが、愛情を長続きさせるもので、女性が男性の攻撃に白旗を掲げた時には、男性の愛情はその目的を終えて、情熱は消えてしまう。女性は、男性の心変わりを悲しみ、嫉妬に身を焦すようになる。こうして、愛は、自己の尊厳の失墜をもたらすものとして否定され、同時に、愛する人に愛されるという幸福も否定される。その幸福よりも、クレーヴ夫人は、<心の平安>を選ぶのである。そして、<心の平安>を得る為に、<bienséance>、<徳 vertu>、<義務 devoir> といったものを愛に対立させる。

≪乱脈にはならない一種の動揺≫に支配されたこの社会では、野心に動かされた陰謀、愛憎、嫉妬などが渦を巻き、<好奇心の地獄>を作り上げている[5]。人々は仮面をつけ、嘘をつき、心を隠し、演技をする。心が動揺している時は、ことさら平気な顔をして、激しい愛情に燃えている時は、無関心を装う。虚偽と打算に満ちた道徳的退廃の上に、品のいい物腰や美しい言葉が花開くのである。他人の穿鑿の目が光っている、この閉鎖的な社会では、その制約も厳しく、まず見かけで判断されるこの世界では、自分に対する世評が最も気がかりとなる。この<世評>は<bienséance>と<徳>に従

うことから得られるであろう。

＜bienséance＞に従うとは、慣習とか常識とかいった、自分のいる社会の秩序を乱さない為の約束事を尊重することであり、＜世間の目＞を意識することである。そして、＜徳＞がそれを補う。既婚女性にとっての＜徳＞とは、常に＜夫の目＞を意識して行動することである。＜bienséance＞が社会生活において、個人の行動を律するならば、＜徳＞はその制約を個人生活の場に持ち込むのである。これら二つは、≪夫以外の男性を愛してはいけない≫とクレーヴ夫人に命じ、彼女の闘いを促すが、どちらも、彼女の最後の決定にはあまり効力を発していないように思われる。ヌムール公への愛を禁じた＜bienséance＞は、一方では、彼女に＜変わった行動＞を認めないことによって、社交界に出入りすること、つまり、ヌムール公と顔を合わせることを命じ、彼女の愛情を増大させもする。クレーヴ公の死後は、＜bienséance＞は、服喪期間は要求するが、ヌムール公との結婚は禁じていないのである。こうして、＜bienséance＞という、＜世間の目＞の矛盾と限界が示される。そしてまた、クレーヴ夫人が、自分の愛情を消し、夫を裏切ったり、失望させたりしない為にすがった、＜徳＞も、彼女の助けとはならなかった。夫は死んでしまったのであるから。彼の死後、夫人がヌムール公と結婚しても、＜bienséance＞と＜徳＞の面で、批難されることはないのである。そこで、最後の会見において、＜義務＞が登場してくる。＜義務＞は、自分の目、自分の理性が尊重する価値観に従うことであり、一歩深められた＜徳＞と言える。こうして、彼女の闘いは、自分自身の意識の次元へと移っていく。

クレーヴ夫人は、世間の目にはどう映ろうとも、自分とヌムール公は、クレーヴ公の死に対して有罪であると感じた。彼女のいう＜義務＞とは、まず、夫の死を招いた男と結婚してはいけないということである。また、夫の死の原因となった男と、どうして、心隠やかに暮らすことができようか？＜義務＞は、自己の尊厳の失墜をもたらす、不確かな愛を否定することによって得る＜心の平安＞と結びついてくる。

≪わたくしが、クレーヴ殿を思い出して感じる義務も、心の平安を求める気持ちに支えられなければ、弱いものでしょうし、同時にまた、心の平安という理由は、義務の支えを必要とするのです。≫(389頁)

しかし、どんなに理性的な言葉を連ねて自分の決心を語ったにしても、この会見においては、まだクレーヴ夫人の拒絶は決定的なものではない。

≪確かに、わたくしは、わたくしの想像の中にしかない義務のために、大きな犠牲を払っているようです。時の経つのを待って下さいませ。≫(389頁)

この言葉を残して彼女は帰っていく。理性と感情の板ばさみになお迷う彼女は、ともかく服喪の期間、遠くへ行って考えようと決める。限界を認めたにしろ、彼女はまだ、＜bienséance＞の制約のもとにいる。彼女は、まだ、宮廷社会の一員に留まっているのである。最後に彼女が、＜隠遁＞に到達する為には、外からの助け、≪死を間近に見る長い病≫が必要となる。死の観念が、彼女に、今までとは違った目で、生を見つめさせ、ここで初めて、彼女は自分の情念を克服するのである。

特権意識の強い、閉鎖的な世界である宮廷社会において、自分の名誉の保持を願う女性は、厳しい＜徳＞の実践を強いられる。理想は、シャルトル夫人の説くように、＜幸福＞と＜徳＞を一致させること、すなわち、＜夫婦愛＞にある。しかし、この世界では、結婚とは、何よりもまず、両親の意志を反映した取り引きである。そして、本質的に移ろいやすい、愛情それ自身が、この理想の実現を不可能にしている。そこでクレーヴ夫人は、一時的な＜幸福＞よりも、＜心の平安＞を選ぶ。＜心の平安＞を得る為に、最初彼女は、＜bienséance＞で十分と考え、次いで＜徳＞にすがり、夫の死後、＜義務＞を拠りどころとする。そして最後に、＜病気—死＞が外部から彼女を支援するのである。

クレーヴ夫人のとった道について、ジャン・ファーブルは言う。

≪最初から最後まで、クレーヴ夫人は自分のことしか語らず、自分のことだけを考えている。これが彼女の遁世と悲しみの深い理由である。≫[6]

確かに彼女には、自分の側からのみ語るという面が見うけられる。しかし、彼女の決心を利己主義の産物だという前に、彼女の置かれている状況を考えてみて欲しい。宮廷という狭い社会において、人々は、輝かしい名声を得ることを望む。そして、男性が何よりもまず戦士であったこの時代、風采、家柄、富、才智といったものと並んで、勇気と武勲とが重要視されていた。和平の機運が高まり、戦場以外に武勲を求めなければならなくなると、女性の征服が戦争に取って代わる。一方、女性にとっては、＜徳—貞淑＞の評判が最も大切である。＜徳＞とは守るものである。征服者、追う者である男性の攻撃に対して、初めから、追われる立場にある女性が、まず、自分のことを考えるのは仕方がない、というよりむしろ、防御側として当然の態度ではないだろうか。

利己主義のみではなく、彼女の決意は、強い自尊心や、苦悩に対する大きな恐怖からきているという意見もある[7]。クレーヴ夫人にとっては、世間で、≪比類なき女性≫という評判をとることによって、あるいは自分自身に向って、≪自分は他の女性達のような過ちは犯さなかった≫と呟くことによって、自尊心を満たすことが何よりも大切だったのであろうか？　愛情に引きずられ、恃みにならない男性にすがって裏切られ、嫉妬に狂い、取り乱した自分の姿をさらすよりは、自分が生きるべく生まれた世界を捨てた方がましだと思ったのであろうか？

自尊心の根底には、≪自分は特別≫という感情があり、どこかで、常に他人を意識している。確かに、クレーヴ夫人の中には、≪他の女性とは違う≫という意識が見られるが、それ以上に、彼女は自分の目を意識する度合いが強いように思われる。彼女にとっては、自分の目に映る自分の姿が最も大切なのであり、自分に対して、自分が自己の尊厳を失ったと感じることを最も嫌ったのである。そして、彼女は、真理の声に耳を傾け、他人よりも、より自分に向かう人のように思われる。愛情に対する彼女の闘いは、自己の尊厳を守る為の闘いともいえるであろう。そこには、束の間の幸福や、自己満足よりも、もっと確かなものを求める気持ちが働いているように思われる。

＜bienséance＞も＜徳＞も愛情を消すことはおろか、それを隠すのにも役立たなかった。理性は、彼女に取るべき道を教えはするが、感情を、そして、しばしば行動さえも、制御できない。クレーヴ夫人は人間の弱さを認め、理性の限界を知る。しかし、人間のレベルにいる限り、認識は、認識のま

まで、心の救済とはならないのである。最後の会見の後も、彼女の心は揺れ続けている。もし、彼女がこのままの状態でいれば、どんなに宮廷から遠ざかっても、迷いは消えず、本当の<心の平安>は得られないであろう。そこで新たなる道が示される。

≪長い間、ごく間近に死を感じたため、クレーヴ夫人は、この世のことを、健康な時とは全く違った目で、見るようになった。≫(393頁)

ここで、クレーヴ夫人の従来の価値観の変革がほのめかされている。そして彼女は、この時点で、夫の死に対する自責の念よりも、もっと深い罪の意識を持ったのではないだろうか。行動では夫を裏切ってはいなくても、心では夫を裏切ったことを認め、夫の生死に関係なく、自分に有罪を宣したのではないだろうか。自分をも含めた人間の弱さと理性の限界を認める時、そして、自分自身に罪の意識を持つ時、彼女の心からは、≪自分は特別≫という意識は消え去っていると思われる。クレーヴ夫人の最終的な隠遁には、利己主義や恐怖よりも、もっと深いところでの価値観の変革を見るべきである。

この小説の結末部分では、<美徳の勝利>というような、誇らし気な調子は感じられない。むしろ、一種の<悲しみ>の響きえ漂い、彼女の隠遁を<一種の自殺>とする見方もうなづけるような気がしてくる[8]。しかし、この結末を語る口調は、導入部の肖像(ポルトレ)の語り手の口調と似ていることを見逃してはならない。そこでの語り手は、宮廷のスポークスマン的、回想録作家的に<公式見解>を述べる存在で、そのまま作者の姿とは重ねられない。ここでも、同じ見方をするべきであろう。ヌムール公は、再び、社交人として仲間のもとへ戻っていき、クレーヴ夫人は、社交界から去って行く。虚偽と苦悩に満ちているとはいえ、魅力的な<気晴らし>の場として、宮廷人達にとっては生きるに価する唯一の世界であるこの社会から去って行ったクレーヴ夫人は、≪徳の模範≫との公式見解はもらっても、彼女の行為は、彼らの目からすれば、理解を超えたものであり、<一種の自殺>と映るのではないだろうか。そして、それは、社交界の価値観の支配から隔たった世界に入ったクレーヴ夫人の姿を暗示しているように思われる。

死を間近に見た為世界を見る目が変わったクレーヴ夫人が、ヌムール公に、≪あなたの妻になりたいという、わたくしの気持ちが、わたくしの義務とも、心の平安とも、相入れないものだとわかりましてからは、他のことには、全く興味を失いました。この世のことを、わたくしは、永久に見捨ててしまったということを知って頂きたいのです。今はもう、わたくしは、来世のことしか考えておりません。≫(394頁)と書く時、私達の目には、朧げな神の姿が浮かんでくる。しかし、この小説において、神の存在は、余りにも稀薄である。それは、この時代、小説の中では、あからさまに神を語ることはしないという決まりがあったということだけでは、説明し得ないように思われる。

この物語の結末は、<理性に導かれた美徳の勝利>を歌ったという印象も与えないが、<神の偉大さ>を称えている感じもない。≪キリストの代理人達に向うよりも、より自分自身に向って問いかける魂≫[9]の物語という印象が強い。

≪ラファイエット夫人は、あらゆる誘惑に抗い、辛苦して、心の平安を勝ち得る、美徳の栄光をう

たおうと思ったのではない。彼女は、傷ましい愛の物語を語ろうと思ったのである。感化小説というより、むしろ、感動を誘う小説である。≫と、アラン・ニデールが言うように[10]、何よりもまず、この小説は、悲恋物語なのである。後見となるべき母親を失った、人生経験の全くない若い女性が、必死に自分の心と闘い、そして、人間の弱さ、生の悲惨を知るに到る。小説の中心となっている、人間のレベルでのクレーヴ夫人の闘いは、傷ましく、私達の心を打つ。最後に、彼女が、人間への語りかけから、神へ目を向けた姿が示される。クレーヴ夫人は、今、新しい道——新たなる希求と贖罪の道——に入ったところである。まだ、先はわからない。本当に、神は存在するのか、彼女は神の声を聞くであろうか。果たして、神は、救いとなり得るのか。この小説の最後に現われる神の姿は、まだ、ぼんやりとしている。それは一筋のかすかな光明であり、暗示であり、疑問である。クレーヴ夫人と読者に提示された課題であり、そして、作者自身が、自分の心に発した問いでもあるように思われる。

≪私は、神の意志に、心から従います。神は全能なのです。≫

ラファイエット夫人がこの言葉を発するまでには、まだ十余年の歳月が必要である[11]。

テクスト及び主要参考書

Mme de Lafayette: *Roman et Nouvelles*, Garnier, 1970.

※本文中での『クレーヴの奥方』の引用は、全て、この版による。

Mme de Lafayette: *La Princesse de Clèves*, Textes Littéraires Français, Droz, 1950.

C. Dédéyan: *Madame de Lafayette*, S. E. D. E. S., 2e édition, 1965.

M-J. Durry: *Madame de Lafayette*, Mercure de France, 1962.

J. Fabre: *L'Art de l'analyse dans la Princesse de Clèves*, Ophyrs, 1970.

R. Francillon: *L'Œuvre Romanesque de Madame de La Fayette*, José Corti, 1973.

M. Laugaa: *Lecture de Madame de La Fayette*, Colin, 1971.

A. Niderst: *La Princesse de Clèves*, Larrousse, 1973.

B. Pignaud: *Mme de La Fayette par elle-même*, Seuil, 1959.

P. Clarc: *Littérature française, L'âge classique II*, Arthaud, 1969.

〔注〕

1) A. Gide: *Les dix romans français que*, Nouvelle Revue Française, avril 1913. M. Laugaa: *Lecture de Madame de La Fayette*, p. 233。

2)『クレーヴの奥方』の初版本は四巻にわけて刊行され、この区分は、現代版の四部の区切りに相当するが、初版本には、「第一部」「第二部」等の記載はないので、印刷の都合上、四つに分けられたといわれている。この稿では、R. Francillon の区分を参考にした。

R. Francillon: *L'Œuvre romanesque de Madame de La Fayette* 第二部、第一章参照。

3) 1678年4月13日付の手紙。

B. Pignaud: *Madame de La Fayette par ell-même*, p. 57.

4) Brantôme: *Vies des hommes illustres et des grands capitaines.*

記録作者（mémorialiste）Brantôme（1538—1614）の他の著作には、*Vies des dames illustres*、*Vies des dames galantes* 等があり、ラファイエット夫人は、『モンパンシエ公爵夫人』、『クレーヴの

奥方』を書くにあたって、Brantôme を精読したと言われている。

『名将伝』におけるヌムール公爵の描写については、C. Dédéyan: *Madame de Lafayette* 第十章、参照のこと。

5) B. Pignaud, *op. cit., pp.* 82—90参照。

6) J. Fabre: *L'Art de l'analyse dans La Princesse de Clèves* p. 65.

7)、8) R. Francillon, *op. cit.,* pp. 168—69参照。 同様に M-J. Durry : *Madame de La Fayette.*

9) M-J. Durry, *op. cit.,* p. 56.

10) A. Niderst : *Introduction Romans et Nouvelles,* Garnier, p. 41.

11) M-J. Durry, *op. cit.,* pp. 53—54.

ラファイエット夫人は、パスカルに理解と関心を寄せ、また、晩年には、トラピストの僧ランセや、ジャンセニストのデュゲ師に教えを乞うたが、信仰への道は険しく、彼女が神へ到達したのは1690年以降、死（1693）を間近に控えてのことといわれている。

B. Pignaud 前掲の書、C. Dédéyana 前掲の書、P. Clarc: *Littérature française, L'age classique II* 171頁参照。